

1 はじめに

九州国立博物館ボランティア学生部会は、ボランティア登録時、学生であれば所属することができる部会である。活動はイベントの企画運営やフィールドワーク及び準備等、多岐にわたり、学生ならではの目線と行動力で博物館を盛り上げる役割を担っている。

2 部会について

(1) 活動日

活動時間：毎週日曜日 午前10時～15時

活動内容：ワークショップ等イベントの企画開催運営やフィールドワーク

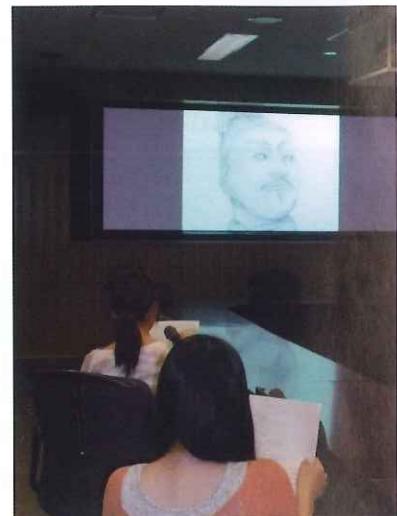
(2) 活動実績

i. まほろばコンサート

- 2011年6月26日：あじっぱを紹介するスライドを作成し、様々な国々の屋台やゲームや楽器の紹介をした。はじめてのイベントで緊張したが、原稿を読むスピードなど練習を重ねることで本番は成功することができた。
- 2012年7月1日：特別展「美のワンダーランド 15人の京絵師」と、文化交流展示室に展示してある「埋もれ木」に関連したスライドショー紙芝居を制作した。絵から構成まですべて手作りし、より良いスライドを作るために何度も資料を読み、展示室に足を運んだ。また、参加者が楽しんで学習できるよう、原稿を読む声の大きさ、速さには気を付け納得できるまで練習に励んだ。
- 2013年7月7日：特別展「中国王朝の至宝」にちなみ、中国の歴史や展示品をスライド紙芝居で紹介した。紙芝居には学生部会独自のキャラクターであるはにわ三銃士を登場させ、見る人が楽しく勉強できるよう工夫した。キャラクター数が多かったので、ビジュアルだけでなく、声の雰囲気や高さに区別をつけるよう、心がけた。

ii. 子どもフェスタ

- 2012年2月19日：はにわの色付け体験と針聞書プラバンの色付けを行った。子ども達にはにわをより知ってもらうためにパンフレットも準備するなど工夫した。子どもフェスタの来館者の多さに驚いたが、1年目も終わりにさしかかり、イベントにも慣れてきたので個々が的確に動くことができ、成長を感じることができた。
- 2013年2月27日：カルタ大会を開催した。九州



スライド紙芝居の練習風景



九博かるた 絵札

国立博物館の常設展の展示物や館内ルールについてのカルタを文章からイラストまで全て手作りで作成した。このカルタは子ども達を対象に博物館により興味をもってもらう目的であったことから、初の試みとして、カルタ大会としてゲーム形式を取り入れた。その結果、多くの子ども達に参加体験をしてもらい、リピーターの子ども達も参加者の2割を越えていた。

- 2014年2月23日：「きゅうポス～九博のたからものをポストカードに～」を行った。内容は、はらのむしや九博の展示物等のイラストを用いてオリジナルのポストカードを作ってもらうというもの。イラストはすべて手描きで、作品も九博のポスターのような斬新なものに仕上がった。当日は多くの子ども達が楽しみ、大盛況となった。

iii. 名古屋

名古屋市博物館や名古屋市立大学との交流は、2009年からはじまり、継続的に交流を続けてきた。

- 2011年11月19日：名古屋市博物館で開催された「ワークショップでござる」は、それまでの成果が形となって現れたイベントと言える。ハニワ色付け、プラ板作り、絞り染め体験が行われた。これは、名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科阪井班（後の名古屋市博物館サポーター MARO）との初めての共同イベント。イベントは成功したものの、うまくワークショップの内容と展示物のつながりを関連付けられなかったことが課題となった。しかし、メンバーの絆が深まり、今後の交流への可能性を感じる充実したワークショップであった。
 - 2012年12月：名古屋市博物館開催されたワークショップ「OSUワークショップ」では、名古屋市博物館の特別展「古事記1300年 大須観音展」に合わせて紙芝居を作成し、発表した。他にも、和綴じ、プラ板、カード作り等のワークショップを開催した。博物館の展示と活動のつながりを実感できるイベントとなり、前回の課題を克服できたといえる。
 - 2013年10月13日：九州国立博物館において「九博 秋の陣」を開催した。イベント内容は、貝合わせ体験、人間すごろく、能装束デザイン。学生部会とMAROメンバーで班をつくり運営し、そのなかで互いに打ち解け、とてもいい雰囲気でイベントを成功させることができた。初の九州国立博物館開催ということで、事前準備や打ち合わせがうまくできないなど、交流イベントの難しさを痛感した。
- ※ イベント開催時だけでなく、打ち合わせや見学等のため名古屋からの来館や、名古屋へ遠征も頻繁に行った。
- ※ 他にも、名古屋ボストン美術館や愛知県美術館等を訪問し、学芸員の方々にお話を伺うなど、ワークショップや学校連携に関することを学んだ。



「ワークショップでござる」時の集合写真

iv. ボランティア独自

学生部会では、まほろばコンサート、子どもフェスタ、名古屋交流の他にも学生部会独自のイベントを行ってきた。

[ワークショップ]

- ・2011年：2011年度は、はにわ色付け体験に対して、財団支援グループ活動として支援をうけ、部会と連動して活動した。はにわ色付け体験は子どもフェスタ以外の活動として8月10月に開催された。1カ月前から約300体の埴輪を作成し、人型、馬型、魚型、鳥型の4種類を準備した。参加者の多さに戸惑いもあったが準備した約300体が無くなるほど好評のイベントとなった。
- ・2013年5月5、6日：文化交流展示室にも展示されている蒔絵螺鈿細工を参考にしたワークショップを行った。金銀の折り紙で蒔絵螺鈿の細工に見立てたパーツをならべ、しおりを作ってもらった。春と秋の2パターンを桜や紅葉型のパンチを使ってパーツを作成し準備をし、当日は、材料である貝殻等を見せて説明し、参加者は展示物への理解を深めた。
- ・2014年1月5日：2014年、新年の幕開けに際してワークショップ「新春 能装束の美」を開催した。内容は、2012年の「九博秋の陣」の「能装束デザイン」を引き継いだもの。展示を一通り見終わった人や他のワークショップから流れて来た人をうまく取り込むことに成功した。来館者に参加して頂くためには、事前のPRや来館者への声かけをしたり年齢層を絞ったりするなどの工夫が大切だと学んだ。

[フィールドワーク]

- ・2012年5月12日19日：ミュージアムウィークを利用して福岡県立博物館、「博多町家」ふるさと館、福岡市美術館、福岡県美術館、王貞治ベースボールミュージアム等を訪問した。福岡市博物館では、金印や木簡の使い方を学ぶことができるワークショップ、「博多町家」ふるさと館では、マグネットへの絵付け等を行った。その他にも、各施設のクイズに参加するなど、どの施設も独自のイベント、ワークショップを展開しており大変参考になった。
- ・2013年4月27日：佐賀フィールドワークを行った。佐賀城本丸歴史館では佐賀の江戸～明治にかけての歴史産業発展の様子を学んだ。佐野常民記念館では、日本赤十字の創始者で佐賀の七賢人の1人である佐野常民の人生を学習した。子どもボランティアの主導のもと、展示解説やワークショップの手順のレクチャーを受けた。また、館長からは子どもボランティアの主旨を聞くなど、ボランティア活動の大切さを改めて実感した。
- ・その他

2012年8月より学生目線の地図を作成し、ボランティア受付に置くことを目標に話し合いを開始した。

太宰府天満宮周辺を実際に周り、参道にある店舗や周辺施設を調べ、太宰府の有名な観光名所から人が気付かないような物まで細かく探索した。完成にはいたってないが、現在も地図作成を継続している。



佐野常民記念館の子どもボランティアとの記念写真



地図作りの話し合いの様子

3 おわりに

(1) 九州国立博物館ボランティア学生部会3期生として、3年間の活動を行った。1、2期の方々から続く「はにわの色付け体験」から始まり、九博カルタや螺鈿しおり、紙芝居の作成など新しい取り組みも試みながらワークショップとして開催した。初めのうちは、メンバーと打ち解けることが出来ずうまく意見交換ができないこともあったが、日々の活動やイベントを共に乗り越えていく過程で、学生部会としての仲間意識が芽生えていった。また、2期から続く名古屋市博物館や名古屋市博物館サポーター MAROとの交流においては、数度の遠征、イベント開催の繰り返しにより親密な関係を築き上げることが出来たと感じる。特に2013年10月に行われたワークショップイベント「九博秋の陣」では、互いの認識の違いや、地理的な距離を乗り越え、長年にわたる共同活動の一つの集大成をむかえることが出来た。

以上の事から交流やイベントの回数や内容についていえば、充実した3年間だったといえる。しかし、学生部会には、解決せねばならないいくつかの課題が存在する。まず、人数不足の問題だ。現在、学生部会の活動人数は9名だが、その内の半数以上が社会人または大学4年生以上である。部会やイベントに常に参加できるメンバーが少ないため、イベントの準備時は少数のメンバーに負担が集中している状況だ。また、ボランティア期間中3年の間に進学や就職など環境の変化に直面し、続行の意思があっても活動に参加するのが不可能になってしまったメンバーも存在する。学生という環境変化が著しい立場にある以上、仕方のない事なのかもしれないが、人数不足の問題は今後部会の存続自体に影響することになるだろう。この問題の解決策として募集回数の増加が挙げられる。現在の3年に1回の募集は、学生部会の状況にあっていないと言わざるを得ない。交流課の方などと相談しつつ、ボランティア全体の募集の他に学生部会独自の募集を行うことが出来るよう働きかけていきたい。

第二に部会の掛け持ちについてだ。3期生は、みな部会の掛け持ちは行わなかったが、今後の学生部会に影響を及ぼす問題として言及したい。部会掛け持ちは多様な形でボランティア活動に関わることができるというメリットがあるが、しかし一方で、活動時間が2倍となり、負担が増える等のデメリットも存在する。掛け持ちは経験者が存在する事から全くの不可能ではないといえるが、難しいと考えた方がよい。掛け持ちはする場合、それが実現可能なのか、自分の環境にっているのかをしっかりとと考え、選択する事が大切だろう。

(2) 4期生へ送る言葉

アイディア次第で学生部会の活動は無限に広がります。そのためには、行動を起こすことが大事。遠慮せずに発言して動いて一緒に新しい時代の学生部会を創っていきましょう。



1～3期メンバー大集合

(3) 謝辞

右も左もわからぬ私たちを支えて、応援してくださった九州国立博物館の職員のみなさま・他部会のみなさま、そして私たちのワークショップやイベントに参加し支援してくださったお客様にお礼を申し上げます。また、名古屋市博物館、名古屋市博物館サポーター MAROのみなさま、そしてさまざまな事を教えて下さった他館の職員・ボランティアのみなさまには大変お世話になりました。今後も九州国立博物館ボランティア学生部会への変わらぬご支援・ご指導をよろしくお願ひいたします。